

# アタッチメント理論とスポーツコーチングの関連性に関する研究

## - 先行研究のレビューと実践的示唆 -

至学館大学健康科学部健康スポーツ科学科  
氏原 隆

キーワード：アタッチメント理論、スポーツコーチング、安心感、主体性

### 1. 緒言

我が国におけるスポーツ指導は、長らく勝利至上主義や根性論、さらには指導者自身の経験則を重視した指導が主流であり、指導者から選手への一方的かつ強制的な関わりが存在してきたと指摘されてきた。しかし近年では、こうした従来型の指導の在り方が見直され、選手一人ひとりの主体性や自律性を尊重し、心理的・身体的安全性を確保する指導へと転換期を迎えている。このような流れの中で、現代のスポーツ指導は「プレーヤーズセンタード (Players-Centered)」という概念のもと、単に技術や戦術を教え込む「ティーチング」から、選手が自ら考え、判断し、行動できるよう支援する「コーチング」へと重点が移行してきている<sup>1)</sup>。

この変化に伴い、指導者には技術的な専門性だけでなく、選手との関係性をいかに構築するかという対人関係能力が、これまで以上に求められるようになった。すなわち、指導者と選手との信頼関係を基盤とし、選手が安心して挑戦や失敗を経験できる環境を整えることが、選手の長期的な成長や競技の継続において極めて重要であると考えられている。一方で、こうした理念が広く共有されつつある現在においても、スポーツ指導における暴力・暴言、ハラスメントに関する事件や事故は依然として後を絶たず、毎年のように報道されているのが現状である。これらの問題の背景には、指導者が自身の指導観や指導方法を時代の変化に応じて更新できず、過去の価値観や成功体験に依存した指導を継続していることが推察される。

筆者は長年、本学バレーボール部の指導に携わってきた<sup>注1)</sup>が、その指導経験を通して、スポーツ指導の在り方が時代とともに大きく変化してきたことを実感している。バレーボールという、連続した判断とチーム内の相互サポートが求められる競技特性の中で、ミスや失点時における指導者の関わり方が、その後のプレーに影響する場면을繰り返し経験してきた。例えば、公式戦や練習試合においてミスや失点の直後に当該選手の判断やプレーを強く叱責した場合には、その後のプレーが消極的になる傾向がみられた。一方で、ミスや失点を一時的な結果として受け止め、次への切り替えを促す助言を行った場合には、その後も積極的なプレーが継続されやすいことを経験している。また指導歴を重ねる中で、選手の価値観や競技に対する向き合い方が時代とともに変化してきたことも実感している。監督就任時からしばらくは、一定の厳しさや叱責が選手の成長につながると考えていたが、近年では、そのような関わりが選手の萎縮や競技離脱につながる可能性があることを認識するようになった。こうした変化は、単に「指導が甘くなった」ということではなく、選手が安心して自己を表現し、挑戦できる関係性の質が、競技力や競技継続に影響することを経験的に捉えてきた結果と考えている。筆者は、スポーツメンタルトレーニング指導士として競技現場でメンタルサポートに携わってきた<sup>注2)</sup>。その中で、メンタルトレーニングにおいても、指導内容以上に指導士と選手との関係性が重要であることを実感してきた。

さらに筆者は、本学の所在地である大府市において、出産を控えた夫婦を対象とした育児講座の講師を務めている<sup>注3)</sup>。我が国の育児を取り巻く社会的価値観も、スポーツ指導と同様に大きな変化を遂げてきており、当初は「父親がいかに育児に関わるか」が主なテーマであったが、現在では両親が協働して子育てを行うことが当然視される時代となっている。この講座の中で、筆者はその時代ごとの育児課題に応じた心理学的知見を紹介し、人間関係の形成と発達を理論的に説明する枠組みとして「アタッチメント理論」を用い、健全な親子関係の構築について解説してきた。アタッチメント理論は、育児スタイルや社会環境の変化に左右されることなく、人が他者とどのように情緒的な結びつきを形成し、それがその後の発達や対人関係にいかなる影響を及ぼすのかを説明する理論であり、子育てにおいて非常に重要な基盤となる。

これまで、自身のスポーツ指導とアタッチメント理論とが結びつくとは想定していなかった。しかし、

スポーツ指導においてコーチングが重視され、指導者と選手との関係性の質が注目されるようになる中で、両者には共通する理論的な基盤が存在することに気付かされた。すなわち、スポーツコーチングが「指導者と選手の関係性の構築」を重視するのに対し、アタッチメント理論は「親子関係の構築」を中心概念としており、いずれも人と人との情緒的な結びつきが個人の成長や行動に与える影響を重視している点で共通している。

そこで本研究では、まずアタッチメント理論の基本的概念を概観し、次にスポーツコーチングに関する理論的な枠組みを整理する。その上で、両者の関連性について先行研究を基に検討し、アタッチメント理論をスポーツコーチングの関係性理解の枠組みとして位置づけることにより、アタッチメント理論がスポーツ指導にどのような示唆を与えるのかを明らかにすることを目的とする。

なお、本研究はアタッチメント理論を「指導マニュアル」や「行動規範」として直接適用することを目指すものではなく、文献研究に基づき、指導者が自身の関わり方を振り返り、選手との関係性の質を捉え直すための理論的視点として、同理論がどの程度有効に機能するかを検討するものとする。

## 2. アタッチメント理論

アタッチメント理論は、イギリスの児童精神医学者 **Bowlby** によって提唱された発達心理学の理論であり、乳幼児と養育者との情緒的な結びつき（アタッチメント）が、その後の社会的・情緒的発達に及ぼす影響を説明するものである<sup>1)</sup>。この理論は、人が特定の他者と情緒的な結びつきを形成し、それを維持しようとする傾向を、人間に普遍的に備わった適応的な特性として位置づけている。遠藤（2010）<sup>8)</sup> や杉尾（2018）<sup>19)</sup> が指摘するように、アタッチメント理論は発達心理学にとどまらず、臨床、教育、政策立案など多様な領域に影響を与えてきた学際的な理論である。

**Bowlby**（1969）<sup>1)</sup> によれば、乳幼児は不安や恐怖、危険に直面した際、特定の養育者に接近し、泣く、しがみつく、後追いをするといった行動を示す。これらはアタッチメント行動と呼ばれ、養育者との近接性を確保することで安心感を回復するための行動体系である。**Bowlby** は、これらの行動が状況に応じて活性化・沈静化する仕組みを「アタッチメント行動システム」として理論化し、個体内に組み込まれた心理的メカニズムとして説明した。アタッチメント行動は単なる不安反応ではなく、安全感を回復し、再び探索行動へと向かうための適応的機能を有すると考えられている。

また、アタッチメント理論は乳幼児期に限定された理論ではない。**Bowlby** は、アタッチメント行動システムが生涯にわたって機能し続けることを指摘しており、初期に形成された対人関係の経験は、その後の友人関係など多様な人間関係に影響を及ぼすとされている<sup>1)</sup>。したがって、アタッチメント理論は、人が生涯にわたって他者との関係性の中で安心感と自律性をどのように獲得していくのかを説明する包括的な枠組みとして位置づけられる。

アタッチメント理論における中核的な概念が、「安全基地（secure base）」と「安全な避難所（safe haven）」である。安全基地とは、子どもが外界を探索し、新たな課題に取り組む際の心理的な拠り所となる存在を指し、安全な避難所とは、不安や失敗によって情緒的な動揺が生じた際に安心感を回復するために立ち戻る対象を意味する<sup>1)</sup>。養育者がこれらの機能を安定して果たすことにより、子どもは安心して探索行動を広げると同時に、困難な状況にも情緒的に対処する力を獲得していくと考えられている。この点において、アタッチメント理論は依存を助長する理論ではなく、安心感を基盤として自律的な行動が促進される過程を説明する理論である。この視点は、スポーツ指導場面において指導者と選手の関係性を捉える上でも重要な示唆を与える。

以上のように、アタッチメント理論は、重要な他者との安定した関係性が個人の情緒的な安定や適応的行動を支えることを理論的に示している。行動を外的に統制するのではなく、安心感に支えられた関係性の中でこそ、人は主体的に探索し、新たな課題に向かうことが可能となる。この視点は、教育や対人関係を扱う実践的領域など幅広い分野において重要な示唆を与えるものである。

## 3. スポーツコーチング

スポーツにおけるコーチングとは、指導者が競技者に対して技術や戦術を教え込む行為に限定されるものではなく、競技者の学習や成長を支援するための継続的な関わり全体を指す概念である。従来のスポーツ指導は、指導者が正解を提示し、それを選手に再現させることを重視する「ティーチング」が主

流であった。しかし近年では、競技者の主体的な学習や意思決定を促す支援としての「コーチング」が重視されるようになってきている。Côté & Gilbert (2009)<sup>3)</sup> は、スポーツコーチングを「競技者の学習、パフォーマンス、ならびに個人的成長を促進することを目的とした専門的な実践」と定義し、コーチングが単なる技術指導ではなく、教育的・発達のプロセスであることを明確に示している。この定義は、コーチングを短期的な競技成績の向上に限定せず、競技者の長期的な成長や人間的な発達を含む広範な実践として捉える視点を提供している。こうした考え方を背景として、現代のスポーツコーチング理論では、指導者中心の一方的な指導から、選手の主体性や学習過程を重視する枠組みへの転換が進められてきた。その代表的な考え方が、プレーヤーズセンタード (Players-Centered) あるいはアスリートセンタード・コーチングである。このアプローチでは、選手を受動的な指導対象としてではなく、学習と意思決定の主体として位置づけ、コーチはその学習環境を設計・支援する役割を担うとされる<sup>12)</sup>。この点において、コーチングは「何を教えるか」よりも、「どのような関係性と環境の中で学びを支えるか」という視点が重視されているといえる。

スポーツコーチングを理論的に支える枠組みの一つとして、自己決定理論 (Self-Determination Theory: SDT) が挙げられる。なおこの自己決定理論はスポーツ領域に限らず、心理学の動機づけ研究において長年にわたり蓄積された理論的・実証的研究に基づく代表的な理論の一つである。自己決定理論では、人が自発的かつ持続的に行動するためには、「自律性」「有能感」「関係性」という三つの基本的心理欲求が満たされることが重要であるとされている<sup>7)</sup>。スポーツ場面における研究においても、コーチの自律性かつサポート的な関わりが、選手の内発的動機づけやウェルビーイング<sup>注4)</sup>、競技継続意志と正の相関を示すことが報告されている<sup>14)</sup>。この点は、自己決定理論が想定する動機づけのプロセスと理論的に整合する。

また、スポーツコーチング研究においては、コーチと選手の関係性そのものを理論的な対象とする枠組みも発展してきた。Jowett (2007)<sup>11)</sup> は、コーチと選手の間を「親密性 (closeness)」「関与・献身 (commitment)」「相補性 (complementarity)」の三側面に、「相互理解 (co-orientation)」を加えた「3+1C モデル」として整理している。このモデルは、コーチングを一方的な指示・伝達の過程ではなく、相互的かつ関係的なプロセスとして捉える視点を提供しており、関係性の質がコーチングの有効性に深く関与することを示している。さらに、近年のスポーツコーチング理論では、競技力向上のみを唯一の目的とするのではなく、選手の人間的成長や長期的な発達を視野に入れた「ダブルゴール」の考え方も示されている<sup>21)</sup>。この立場では、コーチは短期的な勝敗や成果と同時に、選手が将来にわたってスポーツに関わり続けるための心理的・社会的基盤を育む存在として位置づけられる。すなわち、コーチングは「結果を出させるための統制」ではなく、「成長を支える関係性の構築」を含む実践であると理解される。

以上のように、現代のスポーツコーチングに関する理論的枠組みは、選手主体の学習観、動機づけ理論、関係性モデル、目的論といった複数の視点から構成されている。そしてこれらの理論に共通しているのは、コーチと選手との関係性が、選手の学習や成長を支える重要な基盤として位置づけられているという点である。

#### 4. アタッチメント理論とスポーツコーチングに関する先行研究

スポーツ心理学領域においては、2000年代以降、コーチと選手の間をアタッチメント理論の枠組みから捉えようとする研究が見られる。Davis & Jowett (2010)<sup>4)</sup> は、Bowlbyの提唱した安全基地や安全な避難所といったアタッチメントの機能が、コーチと選手の間においても認められる可能性を実証的に報告しており、多くの選手がコーチを重要なアタッチメント対象として認知していることを報告している。また、選手のコーチに対するアタッチメントスタイルと、関係性の質や心理的適応との関連を検討した研究も行われている。Davis & Jowett (2014)<sup>6)</sup> は、選手のアタッチメントスタイルが、コーチとの関係の深さ、社会的支援、対人葛藤といった側面と関連し、これらを通じて選手のウェルビーイングに影響を及ぼすことを示しており、コーチと選手の間を、単なる技術的な指導の効果以上に、選手の心理状態に関与することを示唆している。さらに、アタッチメント理論を用いて、コーチと選手の相互作用の過程を検討した研究では、コーチおよび選手双方のアタッチメントスタイルが、関係の満足度や関係維持に影響を及ぼすことが報告されており<sup>5)</sup>、Rhind & Jowett (2010)<sup>18)</sup> は、アタッチメント理論に基づいたコーチング介入が、選手の不安軽減やモチベーション向上に寄与する可能

性を示唆しており、Carr (2009)<sup>2)</sup>は、指導者が「安全基地」となることで選手の挑戦的な行動が促進されると報告している。これらの研究は、アタッチメントを個人に固定された性質として捉えるのではなく、人と人との関わりの中で変化しながら形づくられていくものとして理解することの重要性を示している。また、近年では、アタッチメント理論と自己決定理論を統合的に用い、スポーツにおける動機づけや適応を説明しようとする研究もみられ、Felton & Jowett (2013)<sup>9)</sup>は、コーチに対するアタッチメントの安定性が、基本的心理欲求の充足を媒介して、選手のウェルビーイングに影響を及ぼすことを示している。

一方、我が国においても、コーチと選手の関係性や指導者の関わり方が選手の心理的状态や成長に与える影響に関する研究が行われつつある。我が国のスポーツ研究においては、「アタッチメント理論」という用語を明示していないものの、指導者と選手の関係性の質や、安心感・信頼関係が競技者の成長や学習に果たす役割を重視する研究が多くみられる。例えば、市村ら (2019)<sup>10)</sup>は、コーチと競技者の関係に関する国内外の研究を総括し、関係性の質が選手の満足感、自己概念、ストレス対処、さらにはチームの凝集性にまで影響を及ぼすことを指摘している。この指摘は、アタッチメント理論が示す「重要な他者との安定した関係性が個人の適応を支える」という考え方と類似している。また山田ら (2022)<sup>20)</sup>は、大学生選手を対象とした調査から、「信頼関係を築くこと」や「選手主体の関わり」が優れたコーチの中核的特徴として認識されていることを報告しており、選手が「良いコーチ」に求める要素として技術的専門性だけでなく信頼関係の構築や人間的側面が重視されていることが示されている。これらの知見は、選手が安心して挑戦や失敗を経験できる関係性を重視する点でアタッチメント理論における安全基地の概念と対応づけて理解することができる。さらに根本ら (2022)<sup>16)</sup>はコーチへのインタビューを通して選手の自律性や心理的側面に配慮したコーチングの必要性を強調している。これは、アタッチメント理論が示す「過度な統制ではなく安心感を基盤とした関わりが自律を促す」という視点と方向性を同じくするものである。このように日本における先行研究は、必ずしもアタッチメント理論を理論的枠組みとして明示している訳ではないものの、指導者と選手の関係性を重視し安心感や信頼に基づく指導の重要性を示唆している点で国外のアタッチメント研究と共通しているといえる。

以上、先行研究の検討から、コーチと選手の関係性の重要性については国内外で多くの知見が蓄積されつつあるものの、アタッチメント理論を中核的な理論枠組みとして明確に位置づけ、スポーツコーチング全体を包括的に整理しようとする研究は必ずしも十分とはいえない。

## 5. 指導現場への応用の可能性と今後の課題

アタッチメント理論を理論的視座とすることにより、スポーツ指導における指導者と選手の関係性を、単なる技術な伝達や統制の問題としてではなく、選手の主体的な学習や成長を支える心理的基盤として捉えることが可能となる。特にアタッチメント理論における「安全基地」や「安全な避難所」という概念は、選手が安心して挑戦や失敗を経験できる指導環境を理解する上で有効な視点を提供するものである。実際の指導現場においては、選手が失敗や不安を感じた際に情緒的に支えられる関係性が確保されていることが、次の挑戦や探索行動へとつながる重要な条件となる。このような安心感を基盤とした関係性は、選手が困難や失敗に直面した際にも心理的に立て直し、再び挑戦へと向かう力、すなわちレジリエンス (resilience) の形成と深く関係していることが示唆される。この点は、選手主体のコーチングや自律を促すサポートを重視する現代のスポーツコーチング理論とも整合的であり、日本のスポーツ指導において指摘されてきた、過度な統制や上下関係を前提とした指導を捉え直す上でも、アタッチメント理論の視点は示唆に富むものである。

またアタッチメント理論とスポーツコーチング理論を統合的に捉える視点は、指導者教育の内容を検討する上でも一定の示唆を与えるものと考えられる。従来の指導者養成においては、技術的・戦術的知識やトレーニング理論が中心となる傾向があったが、近年では、対人関係能力や倫理観、コミュニケーション能力の重要性が強調されている。本研究の理論的な枠組みは、指導者が選手との関係性をどのように構築・維持しているかを振り返るための心理学的基盤を提供するものであり、関係性の質に焦点を当てた学習内容を位置づける際の理論的根拠となり得る。このような指導者教育における関係性重視の視点は、スポーツにおいて実施されているメンタルサポートやメンタルトレーニングで重視されている「ラポールの形成」という考え方<sup>15)</sup>とも深く関係している。ラポールとは、援助者と対象者との間に形成される信頼関係や心理的結びつきを指し、介入や指導が有効に機能するための前提条件として位置づ

けられてきた。小川 (2019)<sup>17)</sup> は、ラポールを「基本的信頼に基づき、安心感と安定感を伴う協働関係」と定義しており、このような関係を持つことで対象者は防衛を緩め、自身の内面や課題に主体的に向き合うことが可能になるとしている。

以上を踏まえ、本研究におけるアタッチメント理論、自己決定理論、ラポール、レジリエンスの理論的關係を整理したものが図1である。これは、アタッチメント理論における「安全基地」および「安全な避難所」としての關係性を基盤に、安心感に基づく指導者と選手關係が形成され、それが自己決定理論における關係性欲求の充足や、指導実践におけるラポールの形成、選手のレジリエンスの発達へとつながる構造を示している。従って、アタッチメント理論を基盤とした安心感に基づく指導者と選手關係は、重要な心理的基盤として位置づけることができる。

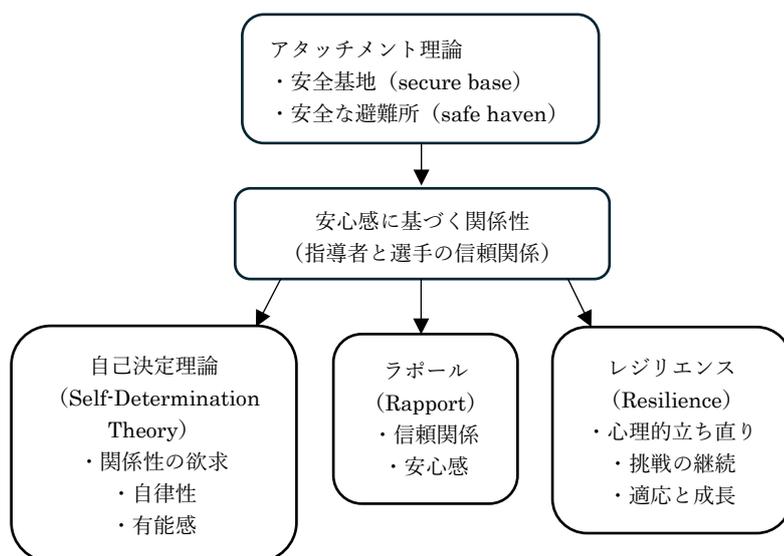


図1 アタッチメント理論を基盤としたスポーツコーチングにおける關係性モデル

一方で、今後の課題も確認することができた。第一に、本研究は文献研究を中心とした理論的な検討であり、アタッチメント理論を活用した指導のあり方が実際の競技場面においてどのような影響を及ぼすのかについては、さらなる実証的な検討が必要である。今後は、質問紙調査や質的研究、縦断的研究などを通じて、コーチと選手の関係がどのように変化し、それが選手の気持ちや行動にどのような影響を与えるのかを詳しく調べることが必要であろう。第二に、スポーツ種目や競技レベル、選手の発達段階によって、指導者と選手の関係性のあり方は大きく異なる可能性がある。したがって、アタッチメント理論の視点がどのような条件下で有効に機能するのかについて検討が必要である。第三に、日本のスポーツ文化における指導の特徴を踏まえた上で、アタッチメント理論をどのように解釈・応用するのかについては、今後さらなる理論的・実証的な検討が求められる。

## 6. 結論

本研究は、スポーツ指導における指導者と選手の関係性を、アタッチメント理論を基盤として理論的に捉え直すことを目的とした。その結果、アタッチメント理論が示す「安全基地」および「安全な避難所」という概念は、選手主体の学習や自律性を重視する現代のスポーツコーチングを理解する上で有効な視点を提供することが示唆された。先行研究の検討から、安心感に基づく指導者と選手の関係性が、選手の動機づけやウェルビーイング、競技継続に関与することが確認され、自己決定理論やラポール、レジリエンスとの理論的整合性も認められた。一方で、本研究は文献研究に基づく理論的検討にとどまっており、今後は競技場面における実証的研究を通して、アタッチメント理論のスポーツ指導への適用可能性をさらに検討していく必要がある。

## 7. 注記

注1) 1989年に監督に就任し現在に至る。

注2) 日本スポーツ心理学会公認スポーツメンタルトレーニング指導士の資格を2005年から2024年まで有していた。

注3) 1995年より講師を担当している。講座名は当初「大府パパママ教室」、現在は「OBU パパ&ママサロン」である。妊婦とその家族の不安を軽減することを目的に年に4回土日に開催されており、講座のテーマは「赤ちゃんとの関係の築き方」である。

注4) スポーツ場面におけるウェルビーイングは、競技に対する前向きな感情だけでなく、安心感をもって競技に取り組み、自己の成長や価値を実感できている状態を指す。

## 8. 引用・参考文献

- 1 Bowlby, J. (1969) *Attachment and Loss, Vol. 1: Attachment*. New York (ボウルビィ, J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1982) 「母子関係の理論 I -愛着-」, 岩崎学術出版社, 東京.)
- 2 Carr, S. (2009) Adolescent-parent attachment characteristics and quality of sport participation experience. *International Journal of Sport and Exercise Psychology*, 7: pp.270-284.
- 3 Côté, J. & Gilbert, W. (2009) An integrative definition of coaching effectiveness and expertise. *International Journal of Sports Science & Coaching*, 4(3): pp.307-323.
- 4 Davis, L. & Jowett, S. (2010) Investigating the interpersonal dynamics between coaches and athletes based on fundamental principles of attachment. *Journal of Clinical Sport Psychology*, 4(2) : pp.112-132.
- 5 Davis, L., Jowett, S. & Lafrenière, M.-A. (2013) An attachment theory perspective in the examination of relational processes associated with coach-athlete dyads. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 35(2): pp.156-167.
- 6 Davis, L. & Jowett, S. (2014) Coach-athlete attachment and the quality of the coach-athlete relationship: Implications for athlete's well-being. *Journal of Sports Sciences*, 32(15): pp.1454-1464.
- 7 Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000) The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11(4): pp.227-268.
- 8 遠藤利彦 (2010) アタッチメント理論の現在-生涯発達と臨床実践の視座からその行方を占う-. 教育心理学年報 49 : pp.150-161.
- 9 Felton, L. & Jowett, S. (2013) Attachment and well-being: The mediating effects of psychological needs satisfaction within the coach-athlete and parent-athlete relational contexts. *Psychology of Sport and Exercise*, 14(1): pp.57-65.
- 10 市村操一・川北準人・岡田弘隆・山口香・木幡日出男 (2019) コーチ・競技者間の人間関係の心理学的研究の展望-CART-Qを用いた研究を中心に-. *コーチング学研究* 33(1) : pp.13-20.
- 11 Jowett, S. (2007) Interdependence analysis and the 3+1Cs in the coach-athlete relationship. (Ed) In S. Jowett & D. Lavallee (In) *Social psychology in sport* . Human Kinetics, Champaign, IL , pp. 15-28.
- 12 Kidman, L. (2005) *Athlete-centered coaching: Developing inspired and inspiring people*. Print Communications, Christchurch, NZ, p288.
- 13 松尾哲矢 (2019) 「JSPO はなぜ『プレーヤーズセンタード』を提唱するのか」, <<https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/coach/event/pdf/SJ56PlayersCentered.pdf>> 2026年2月20日参照.
- 14 Mossman, L. H., Slemp, G. R., Lewis, K. J., Colla, R. H. & O'Halloran, P. (2022) *Autonomy support in sport and exercise settings: A systematic review and meta-analysis*.

International Review of Sport and Exercise Psychology, 17(1) : pp.540–563.

- 15 中込四郎(2016) アスリートとの関係づくり.スポーツメンタルトレーニング教本,日本スポーツ心理学会(編集).大修館書店,東京,pp.24-28.
- 16 根本研・吉紀明・藤野健太・矢野広明・伊藤雅充(2022)「受けた」コーチングが「する」コーチングに与えた影響-アスリートからコーチへの移行期に着目して-.日本体育大学紀要 51: pp.1091–1103.
- 17 小川瑛(2019) 心理臨床家の経験知に基づくラポールの定義について.立教臨床心理研究, 13 : pp.15–24.
- 18 Rhind, D. J. A., & Jowett, S. (2010). Relationship maintenance strategies in the coach-athlete relationship: The development of the COMPASS model. Journal of Applied Sport Psychology, 22(1) : pp.106-121.
- 19 杉尾浩規(2018) アタッチメントの文化的性質-アタッチメントの文化研究の動向と展望. 社会と倫理 33: pp.135-160.
- 20 山田快・堀本菜美・長谷川賢典(2022) アスリートにとって優れたコーチの特徴. スポーツ心理学研究 49(2): pp.157-168.
- 21 関子浩二(2012) コーチングモデルと体育系大学で行うべき一般コーチング学の内容. コーチング学研究 29(3): pp.21–35.